

[シンポジウム報告] 「文化的記憶」とメディアとしての文学

著者	酒井 友里, 齊藤 公輔, 溝井 裕一, 今本 幸平
雑誌名	独逸文学
巻	51
ページ	283-286
発行年	2007-03-19
その他のタイトル	Berichte des Symposiums : Literatur als Medium des kulturellen Gedachtnisses
URL	http://hdl.handle.net/10112/12917

[シンポジウム報告]

「文化的記憶」とメディアとしての文学

今日、文化的記憶（集合的記憶）研究はドイツ語圏の文化科学領域における中心的テーマとなっている。このシンポジウムの目的は、文化的記憶研究の紹介であり、特にメディアと文学との関係に焦点を当てて報告するものである。

1. 酒井 友里：文化的記憶とはなにか？～記憶研究への招待

記憶研究は、20世紀初頭に始まった。その中で今日の記憶研究の出発点となるのが、モーリス・アルヴァックスとアビ・ヴァールブルクの二人である。その後一時期倦怠期に陥った記憶研究であるが、1980年代に入って、このテーマは再び文化歴史研究の分野で注目されるようになる。このうち特に有名なのがフランスの歴史家であるピエール・ノラとドイツのエジプト学者アライダとヤン・アスマン夫妻である。アスマンの著作は中でも特に注目され、今日の記憶研究に欠かせないものとなっている。他には、ドイツ・ギーゼンの特別研究チームが近年大々的に著作シリーズを刊行し、注目を集めている。

集合的記憶とは、様々な現象を要約することのできる概念である。集合的記憶に関してアルヴァックスは三つの要素に分けた。①社会的に限定された個人的記憶は社会心理学へ、②世代記憶はオーラルヒストリーへ、③文化的知識の継承はアスマンの文化的記憶の理論へとそれぞれ発展された。例えば、ヤン・アスマンは、アルヴァックスの理論に基づき集合的記憶をコミュニケーション的記憶と文化的記憶の二つに分類し、さらには、アライダ・アスマンがヤンの文化的記憶を機能的記憶と蓄積的記憶の二つに区別し、記憶研究を発展させている。

記憶研究が現在国際的に時事性を持つ理由として、第一に歴史的な記憶の変遷過程、第二にメディアテクノロジーとメディア作用の変遷が挙

げられる。また、記憶研究は様々な研究領域に、さらに複数の国にまたがって行われる。その結果、研究分野や国家間をつなぐ架け橋となりうるものであり、今後ますます発展が期待される研究テーマの一つである。

2. 齊藤 公輔：文化的記憶とメディア～役割とその変遷～

集合的記憶はメディアなしにはありえないといわれている。そこで、集合的記憶においてメディアが果たす役割を確認し、メディアが移り行く過程で集合的記憶のあり方がどのように変わっていったのかを紹介する。

メディアが持つ特性として「媒介性」と「接続性」があげられる。メディアは時間を超えて記憶を媒介し、空間を超えて記憶を接続する機能を持つ。そもそもメディアとは、コミュニケーション的手段・メディア技術・社会システムの構成要素・具体的なメディアという四つの要素から構成されており、これらの要素はすべて集合的記憶と関連付けが可能である。

メディアの変遷と集合的記憶の移り変わりとして、声の文化と文字の文化における記憶の違いを確認した。声の文化においては機能的記憶しかありえず、また記憶のあり方は常に固定化された言い回しに支配されていた。一方、文字の文化においては厳密性と分析性という新しい感覚を手に入れ、その結果抽象概念という新しい認識の枠組みを生み出した。そして、アーカイヴという新しい記憶システムを発達させたことにより、より豊かで巨大な集合的記憶を形成することになった。

このように、メディアと集合的記憶の関係は非常に重要である。今後、この関係性に注意を向けた研究が必要である。

3. 溝井 裕一：集合的記憶のメディアとしての文学

「集合的記憶」研究は、記憶が生物学的に継承されるだけでなく、文

化的にも継承されるという認識を前提にしておこなわれている。「集合的記憶」の伝達はメディアの存在によってはじめて可能となるが、最近では文学をメディアのひとつと見なして、それと「集合的記憶」との関係を研究する場合もある。

記憶と文学は、その生成過程において類似している。人が何かを想起する場合、まず過去のデータから重要と思えるものを選別し、物語化するが、これと同じことが文学の執筆の際にもおこなわれるからである。むろんこの点は歴史記述などでも変わらない。しかし、文学はフィクションという特性を生かして、それまで考えられもしなかった歴史像やものの見方を示すことが可能であり、同時に、それまでリアルなものとしていた歴史像をくつがえすこともできる。

こうした研究と平行して、文学作品それ自体がもつ記憶、すなわちある作品がもつ過去の作品の記憶に関する研究がある。これに関する研究では、「トポス」や「間テキスト性」などの概念が用いられる。「トポス」とは、異なる時代の文学において再三登場するイメージのことで、たとえば特定の^{うわ}麗しい自然を描いた「理想的景観」がある。また「間テキスト性」とは、あらゆるテキストは一から創作されるのではなく、他のテキストとの相関関係のなかから生まれるとする概念であり、これは文学の源流には「オリジナルテキスト」があるという理論を否定する画期的なものであった。

このように記憶と文学に関する研究は多面的である。しかし、メディアとしての文学と「集合的記憶」の関係や「間テキスト性」などの概念は、美学、歴史学、社会学などへ応用できる可能性を秘めており、逆に、文学研究にこれらの学問が介入できる可能性も示しているといえよう。

4. 今本 幸平：文学的トポスとしての水車小屋

本報告では、研究の間口が極めて広い記憶研究に取り組むに当たって、発表者自身がこれまで研究してきたヴィルヘルム・ミュラーの作品のうち、『美しき水車小屋の娘』という連作詩の舞台装置である水車小

屋というものに注目し、記憶研究においても重視されている、トポスという観点から分析を行うことを試みた。報告の大まかな流れは以下のとおりである。

1. トポスについて：修辞学から記憶論へ
2. 文学作品に登場する「水車小屋」の形象の系譜
3. 「水車」というトポス形成の背景

以上の点に関する考察から、報告者はミュラーの『美しき水車小屋の娘』における水車という形象は、ひとつは中世以来、ヨーロッパの人々の集合的記憶として伝承されてきた、様々な悪事が行われる場所、とりわけ性的放埒のトポスとしての水車。そしてもうひとつは、産業形態の変化が作り出した、牧歌的風景に対する郷愁、いわゆるノスタルジーのトポスとしての水車という、二種類の記憶によって構成されていると結論づけるにいたった。